

婦人と子ども

第一巻第拾壹號

(明治三十四年十一月五日)



(本欄は凡て轉載を禁ず)

黒子太郎

やまとの翁

むかしく或處にまことに貧乏な正直者の夫婦
 が居りましたとき。所で不思議なことにわ其間に
 生れた一人の男の子とゆーのが額の真中に大な大
 きな一つの黒子があるのです。けれどもそれだけな

ら何も別に不思議がる程でもないのですが、誰かがゆ
 ーともなく此子が十四の年になるときつと王様
 のお智様になるのだといつて世間でしきりに八釜
 しく騒いで居るのです。

所で暫らくして此村え王様がお行幸になられました
 た。尤も誰もお従者もお連れ遊ばされないうでたつ
 たお一人ではほんのお微行のお姿なのですから村
 の人々も誰一人王様だとは氣の付くものがありませ
 ん。で、王様わ村人等が大變に八釜しく騒いでるの
 を御覽になつた所から、不思議に思し召されて「一体

何んな事があるのかね』とお尋になりました。する
 と村人等わ一齊に口を揃えて
 いや、どんな事とことじゃありません。二三日前此
 村で、額に大なく、黒子のある子が生れましたので
 ね、何んでもこれわ お芽出たい子に違ないといっ
 て居ましたら どーでしよー 十四になると 王様
 のお髻さんになるのだとゆーこつてす。いや此村か
 ら 王様のお髻さんがお生れになるなんて これほ
 どお芽出たいお話が 又となかるーじゃありません
 か。』

と、こゝいって皆行つてしまいました。

王様わ 之をお聞になつて『さてくつまらない事になつたもんだ 之わ一勘辨して 何んでも村人ともものいった様なことにならない様な工夫をしなければならぬ』と覺し召されて、そこで彼の子供の親たちの處えお出になられました。

御覽になると まるで貧乏人の瘡世帯の事ですか
 ら 汚なくつてくお上りになる處もない。幼子と
 ゆゝのが むさい襤褸衣に包れて二疊の茶の間にこ
 ろがって居る。で、王様わ『や、これがどして私

の智ちになられて堪たまるものか』と覺おぼし召めされたのですが
 そしらぬ顔かほで、夫婦ふうふに向むかわれて

『オー あれわ家うちの子こだろーが、大層たいへん丈夫じやうぶそーだ
 私わたしも此この年としになつて、子こがなくなつて困こまつてるのだが

とーか あの子こを私わたしに貰もらえまいだろーか 一生しやうけん懸命けんめい
 に可愛かわいがつて 立派りつぱに育そだて、上あがるが

と仰おほせになりました 兩親りやうしんも可愛かわいい一人ひとり子このこと
 すから最初はじめてわ斷ことわりましたが 王様おうさまが大變たいへんなお錢あしを出だ
 して『どーか』と
 といつて己おのみませんから とー
 とー吳くれて仕舞しまふことにしました。尤もつとも兩親りやうしんわ 王お

様だとわ知りませんし 勿論吳れてから後がど一なることかも知りませんでしたか 何れ幸な子だから何事も此子のために甘く行くのに違いないと考えたのです。

王様わ まづうまくと幼子を取り出しましたかやがて人知れず此子を小さな箱の中に入れて ひとつと河の真中へ流して仕舞いました。

「まーく これで安心、こーして置けば大丈夫」
悪い王様です 可愛相ともなんとも思わないうで夫つきりお歸還になられました。

所ところが 不ふ思し儀ぎなことにわ あの箱はこが河かはの底そこえ沈しづんで仕し舞まわらないで 其その儘ままふわくと流ながれくくて 王わ様さまのお城しろの近きん所じよの所ところまで行いって ある水すい車しゃ場ばで留とまりま
した

すると恰ちやうどその處ところに、水すい車しゃ場ばのお老お爺やさんが 立たって居ゐましたもんだから 早さっ速そくその箱はこを見み付つけて
何なんでも大たいした寶たから物ものが流ながれて來かたに相そ違ちがないと思おもつ
て 竿こさで以もつて引ひきよせて ほくく喜よろこんで家うちえ持もつ
て歸かへりました。

それからお老お婆ばさんと 二ふ人たりして箱はこを明あけて見みる



とどーでしよー!! 可
愛らしい丸々と肥え太
った幼子が 其中でさも
嬉し相にして にこつい
て居ます。「おやまー老爺
さん」といったきり お
老婆さんわ 嬉しさと吃
驚とで 仰向にひっくり
返り相になりました。お
老爺さんわ あわて、幼

八

兒こを箱はこから取出とりだしながら 兩眼まゆめに一杯いっぱい涙なみだを溜ためて。

『ありがたいく 常々つねづね信心しんじんをしてるから 神様かみさまか

らお授まづけ下くださったのに違ちがない おー老おや婆ばさん、笑わらつ

てるよ此この子こわ、まー可愛かわいーじやないか』

それから 名なわ何なんとつけたらよかるーかと 二人ふたり

で考かんえて見みたが 額ひたいの真ま中なかに大おほきな黒くろ子こがあるから

黒くろ子こ太た郎ろうがよかるーとゆーので 黒くろ子こ太た郎ろうくーとい

って 大だい事じにく 育そだて、行ゆきましたから 黒くろ子こ太た郎ろう

わ だんくくと成せい人じんなつて まことに従したが順じゆんくつて賢かしこ

くつて強きつい子こ供どもになりました。

月日に關守なくて、其事があつてから、も一十四
 年たつて黒子太郎が丁度十四の歳になつた時、ある
 日俄に大雨が降り出しました。所がこの水車場え雨
 舍りにたちよられたのが、前の王様です。で、お老
 爺さんとお老婆さんが黒子太郎を連れてお出迎を
 しました所が、王様わつくぐ、黒子太郎を御覽じて
 『これわお前たちの子か』と御尋ねになりました。
 それで、老夫婦わ十四年前に前の川え流れて來たの
 を拾い上げたのだとゆーことをくわしくお話しまし
 た。

すると王様わ忽ちはっと思ひ出されたのが 十四
 年前のこと、『して見ると此子の黒子といーあの時
 河中え投げ込んだのが 確に此子に違ない。てさて
 面倒なことになったもんだ……よし／＼今一つ計が
 ある』と胸の中で獨り思案を決められなから 態と
 何氣ない風で
 『ふんそーか それわ授り物だったや、見た所大
 層立派な若者じゃ。……時に今から私のお後の所え
 黒子太郎に手紙を持って行って貰いたいんだが、ど
 ーだろーか』すると夫婦わ

『それわもー 王様の御使いですから』とお答を申

し上げて すぐに黒子太郎に支度にかゝらせました。

王様わ其間に 秘密に手紙を認めます。其文言と

ゆーのが 實に次の様なのです

『この若者が此手紙を持って行ったら すぐ役人に

殺させて埋めて仕舞いなさい』

まーなんとゆー恐い王様でしよー!!

夫にしても可愛相なのは黒子太郎です。手紙を以つ

て行くのわ つまり自分を殺して呉れといつて行く

のも同しだのに 夫とわ聊かも知らないで 手紙を

大事だいじに懐よこころに入れてお使つかひに出でかけました。

さて黒子くろこ太郎たろうわだんくくと急いそいで行く中うち不圖ふと道みちを取り違ちがえてとーく其日そのひの夕方ゆいがた大きな森もりの中なかえ迷まよい入いりましたが日ひわ暮くれる暗くららさわ暗くららしてお腹なかが空すいてくる足あしが重おもくなる道みちを尋たづねよーにも人家いへがなし『さー困こまったなーどーしよーか知しらん』と考かんがえながら前ま方を眺ながめると真ま闇くらい森もりの中うちにちらつと火ひの光ひかりが見みえました。

『やれく嬉うれしいぞあれわ吃きつ度と人家いへに違ちがいな
早く行いって一度休やすませて貰もらをー』と獨ひとり言ことをいーな

がら 燈火を目標に 道もない道をひた走り十四に走つ
 てやつと着いて見ました所が 小さな小屋がある
 まづ安心と思つて 這入つて見ると 中に一人の
 老婆さんが 火を焚いて座つて居ましたが 少年の
 這入て來たのを見て 非常に吃驚して 叫び出しま
 した 『まゝ何故お前さんわ此處え來たの？ 何んと
 思つて？』 で、黒子太郎わ
 『私わ水車場から來たのだが お後の所え王様のお
 手紙を届けに行くのです。途中で道に迷つたから
 どゝか今晚わ 此處え一泊らして下さい』



と申しますと 老婆さん
 んわ
 『まー可愛相にお前
 わ何にも知らないだろ
 ーが こゝを何所だと思
 思うのだえ お前こゝ
 わ強盗の棲家だとわ知
 らないかえ 今に大勢
 歸って来るから 来た
 らお前わ 殺されてし

『まゝですよ。』

さすがの黒子太郎も之を聞いて思わず身慄いをするまで驚きました、が、お腹が空いてるのと足の勞れとで今でわもーとーすることも出来ない是非なく心を定めてなーに盗賊だって一人や二人怖いもんかと思つて仕舞つたで老婆に向つて『私しや怖くも何んともない誰れが來たつて宜いのだ夫よりかもー疲勞れて仕方がないからそこいらえ寝かして下さい』

といつていきなり板間え大の字なりになつて

寝て仕舞いました。まー何んと大膽な子でしよー。

其處え間もなくどやくと歸って來たのが七
八人の盜賊です。少年の大の字なりに寝てるのを見
て『なんだく一体何者だ』と大勢一度に叫びま
した。うゝゝ

